

津波防災の日の由来となった物語「稲むらの火」

11月5日は「津波防災の日」です。また、2015年12月の国連総会で、日本をはじめ 142 カ国が共に提案し、この「津波防災の日」を「世界津波の日」としても制定されました。

そもそも11月5日が「津波防災の日」となったのは、1854年（安政元年）11月5日の安政南海地震（M8.4）で和歌山県を津波が襲った際に、稲に火を付けて、暗闇の中で逃げ遅れていた人たちを高台に避難させて命を救った濱口梧陵の逸話が由来となっています。この実話をもとにして作られた物語が「稲むらの火」です。

「稲むらの火」は、津波の恐ろしさや地震後の早期避難の重要性を伝える内容であることから、1937年から10年間にわたって小学5年生用の国語読本に掲載されました。また、2011年度から使われている小学5年生用国語教科書に濱口梧陵の伝記が掲載されています。

「稲むらの火」の物語は世界にも広がっています。2004年のスマトラ沖地震で数多くの命が津波で失われたことから、兵庫県神戸市のアジア防災センターはアジアの8か国向けに、英語、タイ語、インドネシア語など9言語で、「稲むらの火」を使った津波防災の教材を作成し、配布をしました。各国の風俗や習慣に合わせて登場人物の名前や顔、衣服などを変更し、違和感なく読めるように工夫されているそうです。

物語の舞台となった和歌山県有田郡広川町には、梧陵の精神と津波防災を学び受け継ぐために、濱口梧陵記念館と津波防災教育センターからなる「稲むらの火の館」が開館していますので、和歌山県を訪れた際に立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

〈防災士 荻野勝也〉

「稲むらの火」の詳細はこちら👉

稲むらの火の館
濱口梧陵記念館 津波防災教育センター